

メキシコ・キューバスケッチ旅行 39 日間(1) 中川忠司

満 70 歳になり、古希記念に妻と二人、2 年ぶりの海外スケッチ旅行を計画する。キューバを紹介するテレビの影響もあり、観光客が殺到している社会主義国家キューバが、面白そうだと思った。期間は 2017 年 6 月 26 日から 8 月 3 日までにした。この時期は雨期で、初めての中南米、二人ともスペイン語は皆目だめ、不安を抱えての旅だった。日本からキューバへの直行便はない。メキシコの壁画を見たいということもあり、メキシコ経由で行くことにした。旅行会社 HIS で関西空港—羽田空港—成田空港—メキシコ—キューバの往復航空券を取ってもらう。キューバに入国するにはツアーリストカードと海外旅行保険（アメリカ以外の保険会社）が必要で、保険金額と合わせて二人で合計 399640 円だった。少し高いように思ったが仕方がない。

メキシコ

朝早く大阪を出て、成田まで半日かかった。成田からメキシコまで 13 時間のフライトでメキシコシティに着く。アエロメヒコ航空のサービス、機内食は今一だった。メキシコシティの宿は、日本から電話でサンフェルナンド館に予約し、空港まで迎えに来てくれるように頼んでいた。空港の 3 番出口で待っているというのが、その 3 番出口がわからない。我々の名前のプレートを持った迎え人はいない。どうするか思案している時、40 歳代? の男が「ナカガワサン」と声をかけてくれた。彼に連れられて 3 番出口に行く。そこは車がたくさん通る場所でしばらく待っていると、宿の女主人アドリアナさんの運転する車が来た。彼女はメキシコ人で夫が日本人、2 年間京都に住んでいたという。きれいな日本語を話す、美人で空港から宿までタクシーの運転手のように裏道を走る。サンフェルナンド館は、地下鉄 2 号線・3 号線のイダルゴ駅から徒歩 3 分のところにあり便利である。駅周辺の道路の両脇には食べ物の屋台、日用雑貨店などの出店が連なっている。近くに教会があり、路上でマリアの像の陶器なども売られていた。いつもたくさんの人で溢れていた。アラメダ公園が徒歩 10 分と近い。ところが宿の前にある小さな公園には、昼間から売春婦が立っている。夕方にはいかがわしい男が立っているようなところだった。安ホテルが 2 軒あった。我々の宿は常時

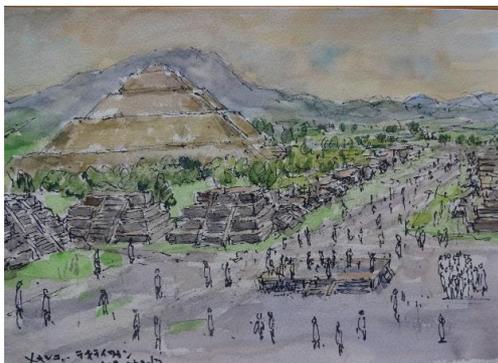


施錠されていて、宿泊者が自分で鉄格子の扉の鍵を開き、それから宿のドアのカギを開いて出入りする。外からの呼び出し鈴やレセプションがなく、必要な時には携帯電話で女主人に電話するしかなかった。我々の部屋は、3 階にあり、トイレ・シャワー、簡易朝食（コーヒとパン）付きで 1 泊 35 ドル（長期宿泊者割引あり）だったが、9 日間宿泊したので一泊 31 ドルにしてくれた。1 階に共同炊事場、冷蔵庫があり、食堂があった。宿泊者は、皆日本人で長期滞在者が二人いた。短期では、東京農大の女子留学生、スペイン語を勉強する若い男性。真夜中に来て、朝早く出る 63 歳の男性は、ベネズエラに居住し、エンジ

ニアで通訳をしている。妻子を現地に残し単身出国してきたという。今、ベネズエラは、政府と反政府、ストと暴動、インフレなど大変なことになっている。チャペス大統領時代、市民は働かなくても生きていけることに慣れてしまい、働かなくなった。ベネズエラは最悪になったという彼の体験談は生々しかった。ハバナで2週間宿泊することになる宿も若い女性からの情報だった。メキシコの治安はよくないようで警官をよく見かけた。公園のベンチで休んでいると浮浪者から金を要求されたが拒否した。彼は何かを叫び、他のベンチでもらうと喜んでいて、押しかけ乞食のような男だった。外出時は、余分な金や貴重品は持たないように言われた。夕方の地下鉄の混雑は日本のラッシュ時以上である。満員電車で乗ることができず、ホームには乗客が溢れている。後ろから押ししてもらい、なんとか乗車できたが、スリに遭わないのが不思議なほどの混みようだった。妻の鞆が挟まれて下車できなくなることもあった。地下鉄は、どこまで乗っても5ペソ（成田空港で換金すると1メキシコペソが約8円、この宿で換金してもらおうと7円だった。）と安い。我々を含め低下層の人が利用している。1日一度は、必ず通り雨、時には激しく降る。傘は必需品だった。だいたい夕方に降ってきた。地下鉄のラッシュを避けるため、スケッチは早めに終わるようにした。

メキシコ料理の主食はトウモロコシの生地を焼いたトルティージャ、これに肉などの具を挟んだ物がタコス。安く屋台で食べられる。非衛生的だと思ったがレストランが見つからず2度ほど食べた。香辛料を自分で適当に入れて食べるのだが、今一だった。少しましなレストランで食べた「ホージョ・エン・モーレ」二人で440ペソ。日本食堂「みかど」で食べた「カツ丼と天丼」と飲み物で450ペソ。こんな生活を毎日続けられない。昼間はサンドイッチやハンバーグが多く、たまに中華バイキング270ペソを利用した。夕食は近くの安ホテルの食堂を良く利用した。写真入りのメニューがあり安く、味もまずまずだった。朝食はスーパーで買ってきたチーズ、卵、ハム、キュウリ、トマトを食堂で食べた。

スケッチは、メトロポリタン・カテドラルやサンフェルナンド教会など教会を数枚描いた。メキシコに来た最大の理由がリベラ・シケイロス・オロスコ・タマヨたちの壁画や絵画を見ることがだった。国立宮殿の正面階段の両側と回廊の壁にリベラが描いた「メキシコの歴史」、見ただけでメキシコの歴史がわかりやすく描かれていた。この宮殿は壁画だけでなく各部屋に彫刻や絵画、中でもシケイロスの作品は迫力があつた。チャペルテペック城の壁画「ディアス独裁から革命」や公園内にある近代美術館でメキシコ美術を堪能した。アラメダ公園

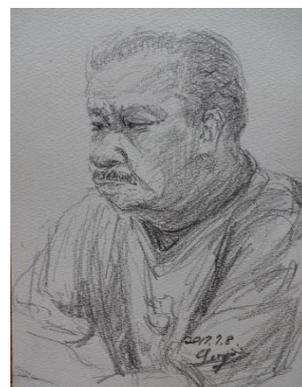


内のペジャス・アルデス宮殿で「ピカソとリベラ」展が開催されていた。リベラ（1886~1957）とピカソ（1881~1973）は同時代に生きた画家で交流もあったようだ。画風やモチーフのよく似た作品を対比して展示され、興味深かった。この宮殿のリベラ・オロスコ・タマヨ・特にシケイロスの壁画は迫力があつた。ディエゴ・リベラ壁画館に「アラメダ公園の日曜の午後の夢」壁画が1点だけ展

示されていた。古代文明の遺跡を見る前に国立人類博物館へ行く。この博物館はテオティワカン、マヤ、アステカなどの遺跡からの発掘品が展示されている。あまりにも広く、発掘品が多い。アステカ遺跡の「太陽の石」の前で多くのツーリストが写真を撮っていて、ガイドがしきりに説明していたのが印象に残っている。アフリカ彫刻を想像する小さな人物像や仮面を面白く見た。朝早く、北バスターミナルから古代遺跡テオティワカンに行く。下車したところが悪かったのか、炎天下のなか、「太陽のピラミッド」まで「死者の道」約3kmを歩いた。スケッチ道具を持っていたこともあり、ほんとに死ぬ道だった。「太陽のピラミッド」は高さ65m、階段248段あり、世界で3番目の大きさのミラミッド。観光客が蟻のように連なって上る。妻が疲れて、もうだめだという。階段半ば頂上は諦めて「月のピラミッド」をスケッチした。石の上に直接座って描いたため、お尻が痛くなる、足がしびれて、日影がない、苦行のスケッチだった。昼食はお菓子とジュースで済ませ、「月のピラミッド」高さ42mに上る。ここからの眺めが良い。「太陽のピラミッド」をスケッチした。帰りのバスが気になり早々に帰ることにした。翌日、地下鉄でトラテロルコ遺跡に行く。トラテロルコ駅から徒歩10分とあったが、道がわからず30分はかかった。アステカ帝国時代の遺跡で遺跡巡りは無料だった。遺跡の石材で作られたサンチャゴ教会をスケッチした。メキシコでの滞在は病気もせず、妻がもう少しで単車に轢かれそうになったことがあったが、事故もなく過ごせたのは幸いだった。次回はキューバ

メキシコ・キューバスケッチ旅行 39日間(2) キューバ

メキシコ10日間の滞在を終え、キューバへ約3時間のフライト。メキシコ空港での搭乗手続きは、自分で機械から搭乗券を発行するシステムだった。若い男性がサポートをしてくれたが戸惑った。案の定、座席は妻と別々だった。離陸後、乗務員に頼んで、一緒に座ることができた。キューバの宿泊先は、コロニアル建築が残る旧市街地に決めていた。ガイドブックに載っていたカサ・パルティクラル。いわゆる民宿は、安価で部屋を借りることができる。メールで予約した「セルビオとミリアムの家」は、旧市街地にあり、1泊25CUC(クック)(約3000円)だった。メール



で空港に迎えを頼んでいたので「NAKAGAWA」のプレートもって迎えが来ていた。ご主人のセルビオさんは50歳代、わかりやすい英語で、市場や換金の場所を教えてくれた。明るく愛想がよく、いつもニコニコしている。当初3日間の予定だったが、居心地が良く4日間延長した。部屋はそのまま借りることができると思っていたが、別の部屋に変わることになった。少し狭く、トイレ・シャワーが共同以外は同じ条件だった。宿は庶民が暮らす地域にある。今にも壊れそうなビル。通りには街の人々がたむろしている。道路はゴミが多い、朝方、黒人が毎日清掃していた。路上で子供がビー玉やボール遊びをしている。店舗は看板が出ていない。店の中に入らないと何を売っているか分らない。ビエハ広場や海岸が近かった。1週間後、旧市街地の中心、セントラルパークまで3分、旧国会議事堂(カピトリオ)

近くにあるカサに宿を変える。(メキシコの宿で紹介されたカサ) 古い5階建てのビルの3階にあり、古いエレヴェータがある。どこかの階で止まったまま動かないことが良くあった。毎回、いつ止まって閉じ込められるのではないかと心配しながら利用した。この宿でも鍵は、部屋、入り口のドア、鉄格子のドア、ビルの鍵と4個ある。それぞれ色分けしてくれているのだが、覚えるのに苦労した。部屋はツインベッド、エアコン、冷蔵庫、テーブル・椅子、家具付きの一部屋だけを貸している。トイレとシャワーは、家主と共同で、1泊20CUCだった。今までの宿は、シャワーのお湯があまり出なかった。この宿はたっぷりお湯がでた。家主はフラン・ミラレス、57歳独身。彼は、喘息で薬を常用していた。スペイン語しか話さず、絶えず話しかけてくる。「指さしスペイン語会話」で会話を試みるのだが、もどかしく切れそうになることもあった。朝食は部屋で食べた。彼は毎朝、コーヒーを持ってきてくれた。時には昼食や夕食ももってきてくれた。彼の作ったキューバ料理、豆とお米の入ったスープ、ジャガイモ・サツマイモとソーセイジの煮付け、ラーメンのようなパスタ、外で食べることを思うと、ありがたくいただいた。彼の部屋に居候している感じだった。部屋の窓や屋上からの眺めが良い。何枚かスケッチした。1週間後、世界遺産に登録されているトリニダに行く。コレクトタクシーで5時間ほどかかった。一人30CUCだった。コレクトタクシーは、宿から宿まで送ってくれる。中国製の車なのだが、運転手側のドアが破損していて、途中雨が降り出すとガラスの開け閉めができず、苦労していた。乗客はトリニダに住む太った婦人が助手席、韓国の中年婦人と我々が後部座席に3人の相乗り、窮屈で帰りはバスにした。トリニダのカサは、フランさんに紹介された宿。女主人エルビリータさんは、英語を少し話す。この宿は中心部まで遠く、宿の周りにレストランがない。部屋は、ファミリー用で広い、三日目にツインのベッドの部屋に変わった。冷蔵庫は少し遠いところにあり共同だった。宿を確保できた安心感で4日分の宿賃(1泊25CUC)を前払いしたため、部屋をキャンセルできなかった。宿からスケッチ道具を持ち、古い町並みと石畳の通りまで歩くのは疲れる。スケッチに便利な宿を探す。満室の宿が多い。革命博物館の近く、バスターミナルまで5分のカサ、ホステル・アマティスタは、23日から空き室になるので3日間予約した。宿の主人は英語を話し、奥さんは美人でセクシーだった。部屋は広く年代物のツインベッド、トイレ・シャワー、エアコン、冷蔵庫付きで1泊30CUCだった。キューバの暑さ、昼間は特に暑い。昼食後は宿に帰り、1時間ほど休憩してからスケッチに出かけていた。傘は持たなくても、熱中症にならないよう水は必需品だった。エアコンなしの生活は、耐えられなかった。エアコンはどこの宿も古いウインドウ型で音がやかましかった。キューバの料理、主食は米、小豆と一緒に炊いたCongriをよく食べた。赤飯に似ている。代表的な料理がロバ・ビエハ、野菜と牛肉、マトン、鶏肉等と一緒に煮たもの。最低8CUCから10CUC。野菜は少なく種類も少ない。果物は、マンゴ、パイア、スイカ、バナナ、パ



イナッブルが安い。昼食はメキシコと同じくサンドイッチやピザ等で済ました。夕食は日本食堂がセントラルパーク近くにあり、よく通った。ぶっかけそば、カツ丼、焼きめし、カレーライス等日本と同じ程度の値段だった。宿泊料は安く済むが、食事代は日本で生活するのとあまり変わらない。オビスポ通りのレストランでは、生バンドでサルサなどの演奏が盛んである。ストリートミュージシャンも多く、通りは音楽で溢れていた。外出して困ったことはトイレ、公衆トイレはない。美術館や博物館、レストランやカフェに入り利用するのだが、水洗便所なのだが水が出ないところが多かった。国立美術館のトイレでも出なかった。給水車をよく見かけた。水の貴重なのがよくわかった。電気も月に一度は停電するという。フランさんのビルは朝7時から昼間までエアコンの電源が切られ使えなかった。セントラルパークに隣接する国立美術館ユニバーサルアート館は、エジプト、ギリシャ彫刻や壺、イタリア、オランダ、フランス、スペイン絵画を見た。スルバラン、ベラスケス、レンブラント、グレコなど有名作家の作品があった。日本絵画では尾形光琳の「紅白梅図屏風」があり驚いた。たぶんコピーだと思う。日本の国宝がここにあるわけがない。もう一つの芸術館が本館で、キューバ芸術の全貌を見ることができた。写実から現代美術までキューバ美術の多様性、表現の自由を強く感じた。入館の際にもらったパンフレットを見せると後日、入館料なしで再度入館できた。芸術館は3回入館した。ハバナの治安、夜は知らないが、昼間は良いように思った。黒人、白人、混血人と多様な人種が生活している。それは建物や車にも表れていた。旧市街地のコロニアル風建築や新市街地のモダンな建築。人力車、馬車、クラシックカー、中国製の車と多様である。古いものと新しいものが共存していた。警官はそれほど目立たず、乞食を見かけることは少なかった。片足や片手をなくした身体障害者が路上で立っていたのが印象的だった。カストロ独裁社会主義国家のイメージはほとんどない。カストロの銅像や写真・ポスターも見なかった。7月26日は革命記念日(祝日)である。この日、トリニダからハバナまでバスで移動したが、何もなく、平日と全く変わらなかった。ハバナの宿は再度フランさんのカサにお世話になった。帰国まであと3日、疲れからか、テイクアウトした食事が悪かったのか、原因はわからないが、強い下痢と吐き気、微熱が出た。妻は、下痢はしなかったがよく似た症状。フランさんが病院を強く勧める。新市街地に外国人専用



病院がある。保険に入っているので使わない手はないと思い、行くことにした。病院というより診療所に近い、受付でパスポートを見せ症状を身振り手振りで訴える。患者が少ないこともあり、すぐに医者が来て呼ばれた。入院しなさいといわれるのが一番怖かった。問診と形式的な聴診器で診察。薬が出たが、その薬をどのように飲むかわからず、医者の実演で理解した。粉薬1袋をミネラルウォーター250mlに溶かし、適当に飲む。ポカリの

濃い味がした。キューバのミネラルウォーターは美味しくなかったが、この溶かしたミネラルウォーターは美味しかった。それと栄養剤のような水薬の処方箋をもらう。病院内の薬局で薬をもらい、薬剤の支払いをする。受付で診察料金を支払いパスポート受け取る。妻と二人で1万円ほどの支払いだった。1日休養したら良くなった。70歳から青春だと思い、若い気持ちだけで出かけたが、肉体的、体力的には、やはり70歳である。小さい字が眼鏡をかけても読めない。特に記憶力は、認知症かと思うほど特に固有名詞が覚えられない。今回の旅は、妻と一緒にいたからできた。彼女のサポートなしでは無理だったことを痛感した。妻に感謝である。



(オビスボ通りへミングウェイの定宿)